

子供たちにおける居住環境と 健康影響との関連性について

東海大学医学部地域保健学

逢坂 文夫

要約：最近では、乳児・幼児や児童などの生活環境および生活形態が急激な変化を示し、健康への影響も表面化してきている。本報告では、幼稚園児における同胞数および身体的活動性と筋力量の一指標である体温との関連性について検討した。その結果、幼稚園児における起床時の体温は、10数年前に比べ変化がみられ、同胞数や身体的活動性の相違により、特に女子において顕著な違いが示唆された。さらに、居住地域や居住階においても、その差がみられた。

見出し語： 同胞数 身体的活動性 体温 居住環境 生活形態

〔目的〕

最近では、乳児・幼児や児童などの生活環境および生活形態が急激な変化を示し、健康への影響も表面化してきている。その一例として、アレルギー性疾患に対する影響因子である住宅の気密性などに伴うダニの健康影響が顕在化し、各方面で注目を集めている。また、子どもたちの遊び形態も“動”から“静”に推移し、さらに出生率の低下などに伴い遊び相手である同胞数が減少してきている。そこで本研究では、生活環境（ハード面）から

みた影響やそれら環境下での暮らし方（ソフト面）や核家族化からみた影響に視点を合せ、乳児・幼児からのすこやか対策の必要性を検証するために、今回は、幼稚園児における同胞数および身体的活動性と筋力量の一指標である体温との関連性について検討した。

〔対象および方法〕

調査は、1992年7月～9月にかけて、神奈川県下における12幼稚園の園児（合計：2174名、男子：1134名、女子：1040名）を対象に、

東海大学医学部地域保健学

Department of Community Health School of Medicine Tokai University

生活環境質問票および平型水銀体温計を用い体温測定を実施した。体温の測定箇所、方法およびその値は、保護者が園児の腋下で行い、測定時間 1回につき10分間とし、身体的活動の影響が少ない起床時に連続 3日間測定し、その平均値を用いた。なお、測定期間中に、体調不良を訴えた者および体温の測定値が 3日間の内 1回でも欠測した者は、除外した。同胞数は、① 1人っ子、② 1人、③ 2人以上とした。身体的活動性は、保護者からみた園児の①活動的、②普通、③非活動的に分類した。さらに、経年的な比較では、小林らが1978年 7月に今回と同様の調査方法で行った成績を用いた。

[結果および考察]

男女別にみた体温は、男子：36.17 ±0.28℃、女子：36.13 ±0.29℃であり、女子が男子に比べ有意 ($p<0.001$) に低かった。1978年の調査成績では、男子：36.25 ±0.35℃、女子：36.23 ±0.36℃であった。1978年と1992年の値を比較すると、男女ともに、1992年の値が1978年に比べ有意 (男子： $p<0.01$ 、女子： $p<0.001$) に低かった。上記の成績では、統計学的に顕著な有意差がみられた。しかし、使用した体温計の目盛は、少数点第一位までしか読み取ることができない。また、体温計には、検定公差 (±0.1℃) や使用公差 (±

0.2℃) が存在し、今回の調査成績も、その範囲内であった。そこで、以降の解析は、36℃未満の割合で検討した。

男女別にみた36℃未満の割合は、男子：19.0%、女子：25.2%であり、女子が男子に比べ有意 ($p<0.001$) に多かった。1978年の調査成績では、男子：4.2%、女子：6.9%であった。1978年と1992年の値を比較すると、男女ともに、1992年の値が1978年に比べ有意 ($p<0.001$) に多かった (図1)。

地域別に36℃未満の割合をみると、男子では、神奈川県県央地域：12.9%、横浜市：25.6%、女子では、神奈川県県央地域：19.3%、横浜市：31.4%であり、男女ともに、横浜市が神奈川県県央地域に比べ有意 ($p<0.001$) に多かった (図2)。

同胞数別に36℃未満の割合をみると、男子では、① 1人っ子：19.5%、② 1人：19.5%、③ 2人以上：17.9%、女子では、① 1人っ子：31.9%、② 1人：24.2%、③ 2人以上：24.6%であった。身体的活動性別に36℃未満の割合をみると、男子では、①活動的：17.4%、②普通：19.9%、③非活動的：17.6%、女子では、①活動的：22.2%、②普通：24.3%、③非活動的：35.6%であった。36℃未満の割合は、女子では、同胞数の増加とともに減少し、身体的活動性では、非活動的が活動的および普通

に比べ有意 ($p < 0.01$) に増加した (図3. 4)。

そこで、女子において、同胞数および身体的活動性別に36℃未満の割合をみると、同胞数 1人っ子では、①活動的：25.9%、②普通：27.1%、③非活動的：57.9%、同胞数 1人では、①活動的：21.7%、②普通：23.9%、③非活動的：30.6%、同胞数 2人以上では、①活動的：21.9%、②普通：23.9%、③非活動的：35.5% であり、1人っ子で非活動的な集団が、2人以上で非活動的な集団を除き、それ以外に比べ有意に多かった (図4)。

居住階別に36℃未満の割合をみると、一戸建て住宅：19.8%、集合住宅：24.3%、集合住宅の1-2階：21.9%、3-5階：25.9%、6階以上：27.0%(6-9階：24.9%、10階以上：32.8%) であり、集合住宅、集合住宅の3-5階、6階以上および10階以上が一戸建て住宅に比べ有意 ($p < 0.05$) に増加した (図5)。

したがって、上記の成績からみる限り、幼稚園児における起床時の体温は、10数年前に比べ変化がみられ、同胞数や身体的活動性の相違により、特に女子において顕著な違いが示唆された。さらに、居住地域や居住階においても、その差がみられた。

今後の課題点としては、最近の我が国では

急速な勢いで高齢社会に突入しており、高齢者に対する関心度は高い。しかし、大きな視野からみると、21世紀の日本を支える子供たちは、経年的に顕著な減少がみられている。よって、それらの健康度や生活環境・生活形態を把握することは、行政のみならず、我が国の最も優先すべき課題のひとつであり、その解決方法の探究は、急務である。

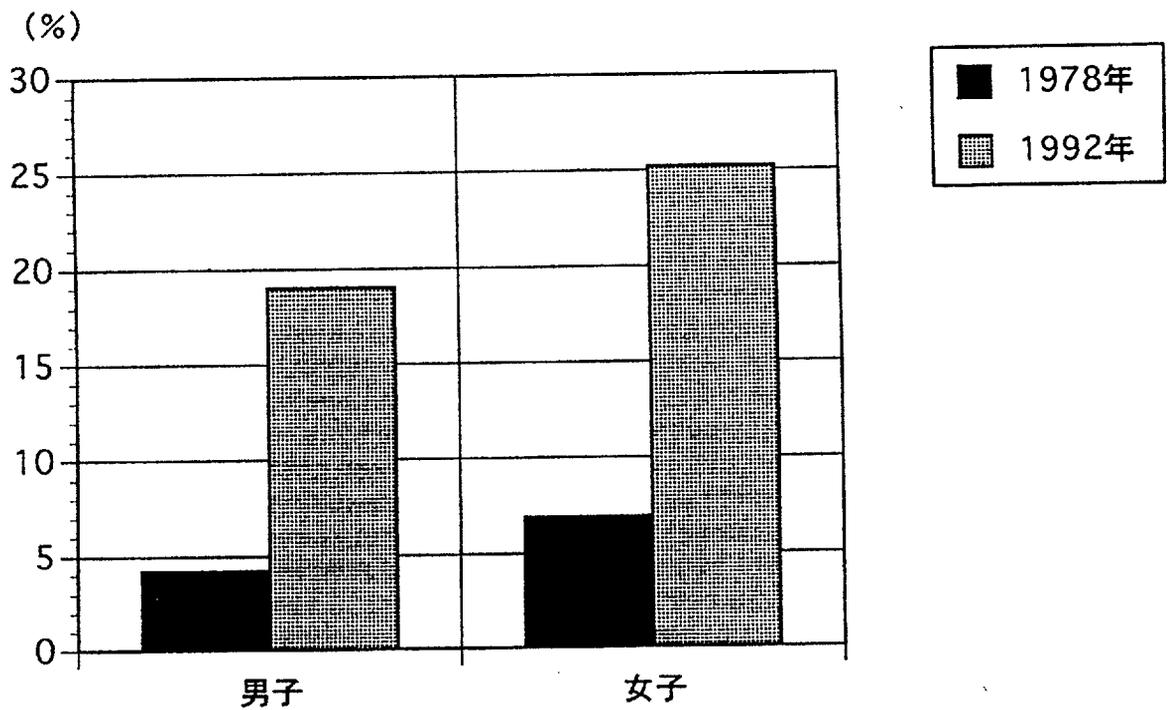


図1 年次別にみた幼稚園児の体温における36度未満の割合（起床時）

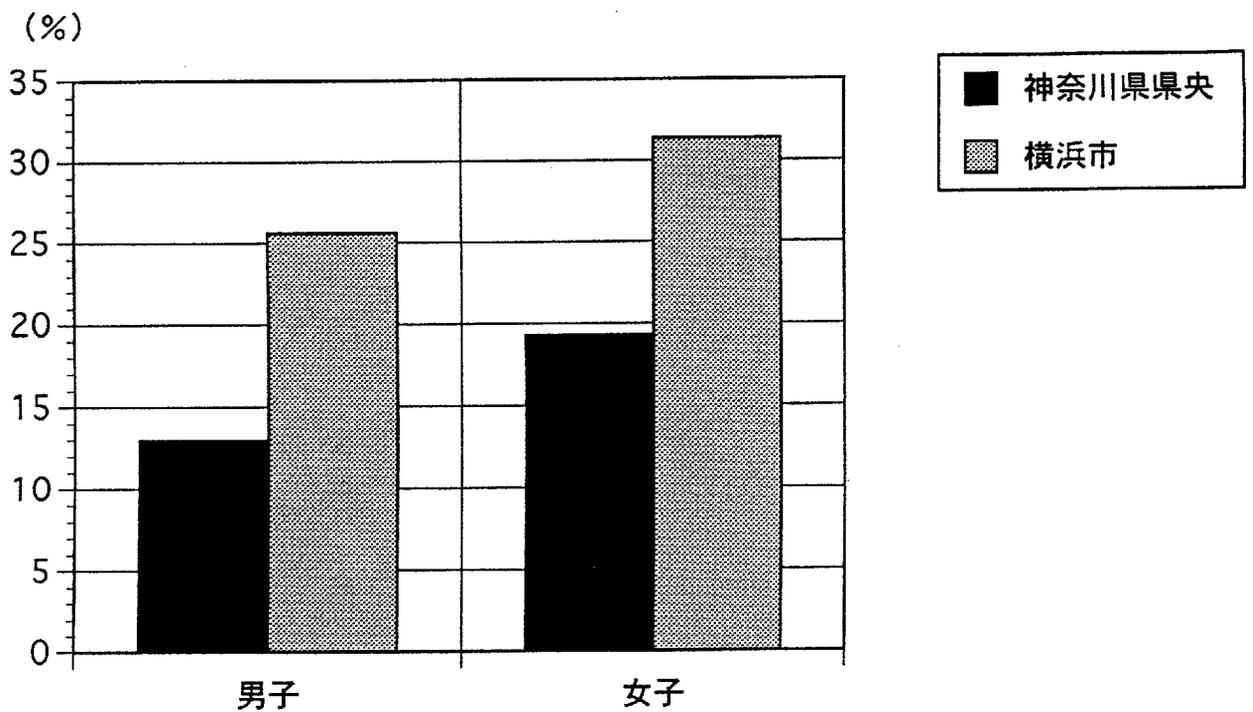
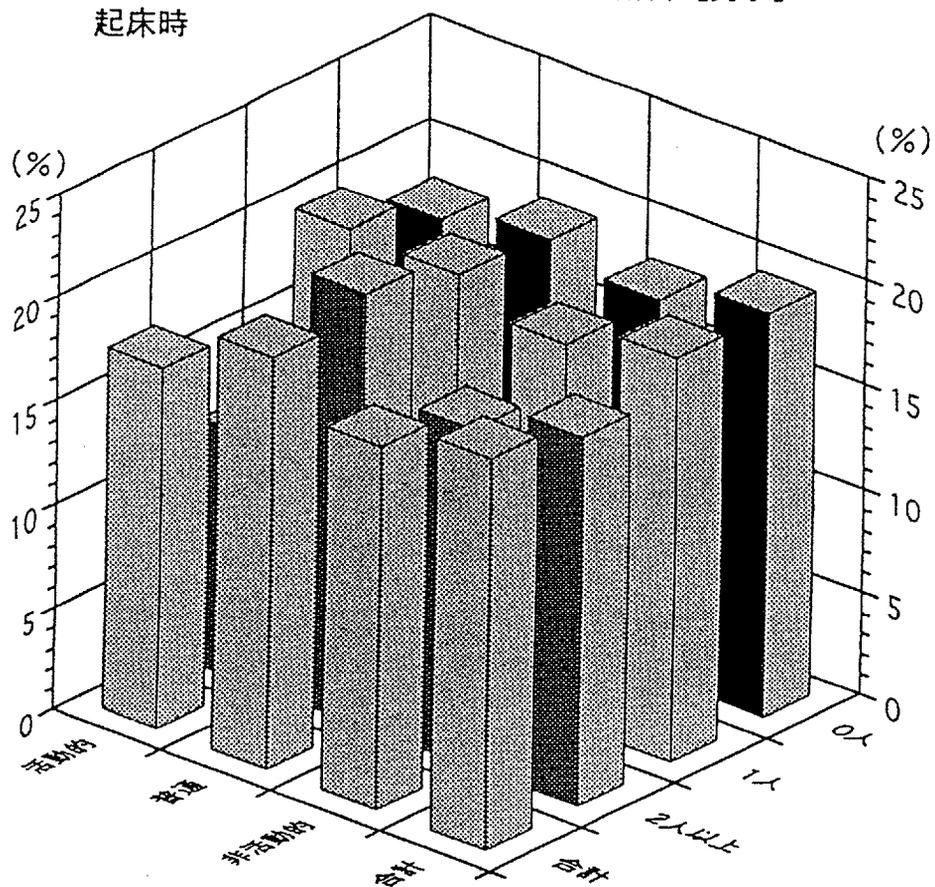
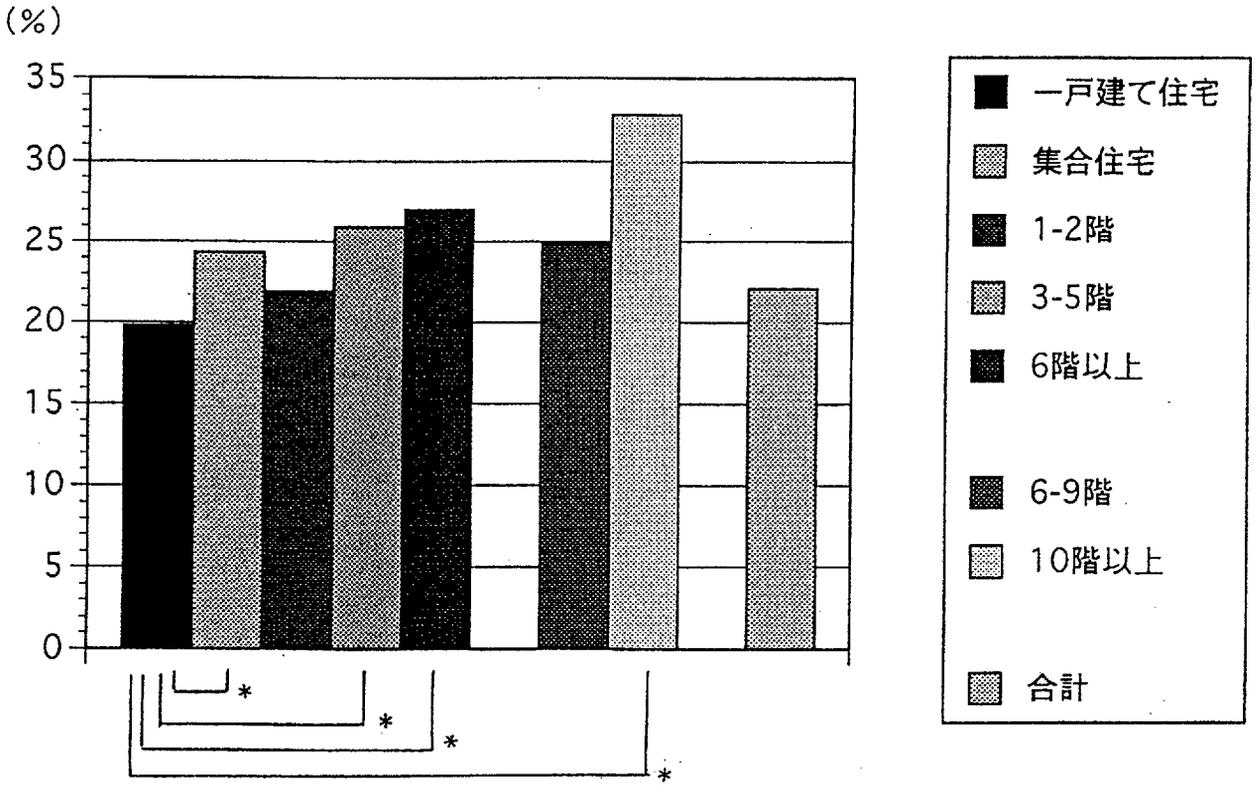


図2 地域別36度未満の割合（起床時）

図3 幼稚園児の体温における36度未満の割合 [男子]
起床時





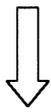
* P < 0.05

図5 幼稚園児における居住形態別にみた起床時3.6度未満の割合



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:最近では、乳児・幼児や児童などの生活環境および生活形態が急激な変化を示し、健康への影響も表面化してきている。本報告では、幼稚園児における同胞数および身体的活動性と筋力量の一指標である体温との関連性について検討した。その結果幼稚園児における起床時の体温は、10 数年前に比べ変化がみられ、同胞数や身体的活動性の相違により、特に女子において顕著な違いが示唆された。さらに、居住地域や居住階においても、その差がみられた。